

目次

I	テーマ設定理由	49
II	研究目標	49
III	研究仮説	50
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	50
V	研究内容	50
	1 表現について	
	(1) 思いや考えを表現するとは	
	(2) 絵本づくりと読み聞かせにおいて表現するとは	
	2 対話的かかわりについて	
	(1) 対話とは	
	(2) イメージを具体的にするための対話的かかわり	
	(3) 表現を楽しむための対話的かかわり	
VI	保育実践	53
	1 保育計画	
	2 保育の実践 1	
	3 保育の実践 2 (本時)	
VII	結果と考察	54
	1 作業仮説(1)の検証	
	《結果》	
	《考察》	
	2 作業仮説(2)の検証	
	《結果》	
	《考察》	
	3 全体を通しての検証	
	《結果》	
	《考察》	
VIII	研究の成果と課題	60
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献》

《幼児教育》

幼児が思いや考えを楽しんで表現するための保育の工夫 ～絵本づくりと読み聞かせにおける対話的かかわりを通して～

那覇市立識名幼稚園教諭 池田 尚子

I テーマ設定理由

「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれている」とR.カーソンが述べているように、子どもは生活の中で心を動かし、いろいろなことを感じたり考えたりしている。幼稚園教育要領の領域「表現」には、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と示されており、幼児が心を動かし思いや考えを表現していくことが、発達にとって重要であると考えられる。また、ねらいには「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」と記されており、思いや考えを楽しんで表現することが、表現する力を育む上で大切であると思われる。

ここで、幼児が思いや考えを楽しんで表現するために、言葉に着目したい。幼稚園教育要領解説では、領域「言葉」において、幼児は教師や友達とのかかわりの中で、「自分の話したことが伝わったときの嬉しさや相手の話を聞いて分かる喜びを通して、もっと話したいと思うようになる」と記されている。このことから、言葉で教師や友達と思いや考えを伝え合うことによって、伝わる喜びを感じ、表現する楽しさを感じるようになると思われる。

クラスにおける幼児の実態をみると、友達と思いや考えを伝え合いながら遊ぶ子がいる一方で、自分から進んで思いや考えを伝えようとしないうちの子がいる。また、自分の思いや考えを相手が理解できるように伝えることが難しい子もいる。このことから、言葉を使って思いや考えを表現することに自信がない、思いや考えを言葉で表すことが難しいといった様子が伺える。これらの実態を踏まえ、幼児の気持ちを受け止めたり、話を聞いたりしながら、一緒に話し合っただけで考えていく保育を行ってきた。しかし、思いや考えを言葉で伝えさせようとするあまり、表現を楽しみ、表現したくなるような気持ちを大切にすることが足りなかったのではないかと考える。

そこで、幼児が自分の思いや考えを表現しながら活動できる絵本づくりと読み聞かせを取り上げ、対話的かかわりを通じた保育の工夫について研究を行いたい。幼児が絵本を作る過程や作った絵本を読み聞かせる過程において、教師対幼児、幼児対幼児、さらにクラス集団で、内容について話したり聞いたりする対話的かかわりを行うことで、幼児が自分の思いや考えを楽しんで表現することができるだろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

幼児が思いや考えを楽しんで表現するために、絵本づくりと読み聞かせにおける、教師や友達との対話的かかわりについて実践的に研究する。

Ⅲ 研究仮説

1 基本仮説

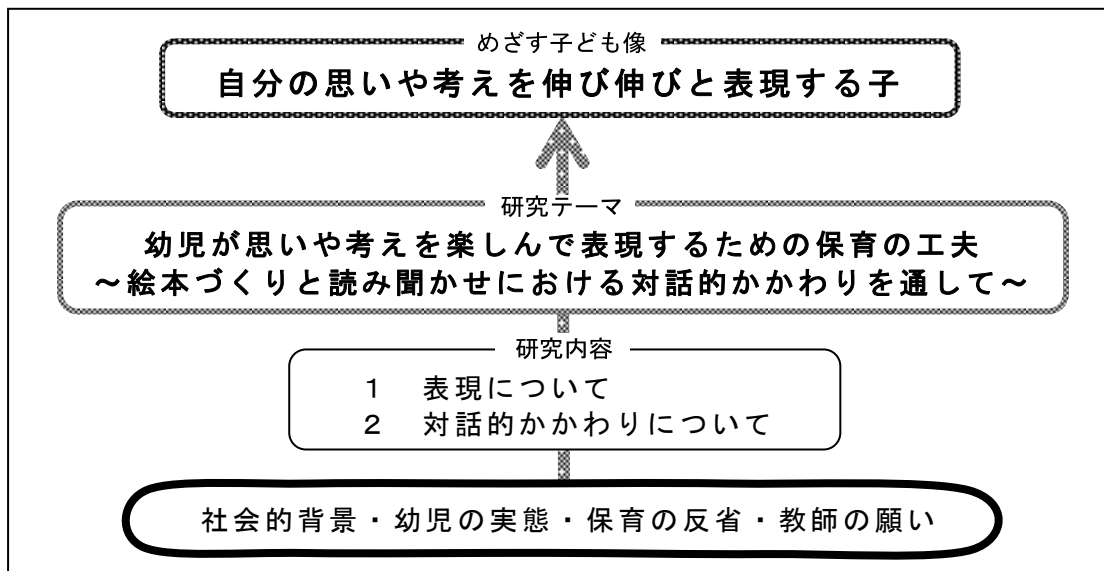
絵本づくりや読み聞かせの過程において、教師が対話的にかかわりを行うことで、幼児は自分の思いや考えを楽しんで表現しようとするだろう。

2 作業仮説

(1) 絵本づくりの過程において、イメージを具体的にするために、教師が聞きとりを中心とした対話的にかかわりを行うことで、幼児は絵や話の内容について、教師や友達と話したり、聞いたりしながら、自分の思いや考えを絵や言葉で表すようになるだろう。

(2) 自分の絵本を読み聞かせる過程において、教師が幼児同士をつなぐ対話的にかかわりを行うことで、幼児はお互いの表現の面白さを共有したり、受け止めたりしながら、楽しんで表現するようになるだろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 表現について

(1) 思いや考えを表現するとは

岡本夏木（1982）は、「子どもが人びとのかかわりをおしながら、自分の世界をつくりあげていく」と述べ、「人びとのかかわりあい」を人間の「発達の間」であると論じている。幼稚園教育要領解説の領域「表現」では、「幼児は、自分の素朴な表現が教師や他の幼児などから受け止められる体験の中で、表現する喜びを感じ、表現への意欲を高めていく」と示されている。幼児は、人とかかわりの中で表現しようとする気持ちを育てることがわかる。また、同解説の領域「言葉」には、「相手に分かるように言葉で伝えようとすることで、自分の考えがまとまったり深まったりするようになる」と記述されている。これらのことから、幼児は、人とかかわりの中で、思ったことや考えたことを自分なりに表現する楽しさを味わいながら、徐々に思いや考えをはっきりしたものにしていくと捉える。

内田伸子（1989）は、思考の過程において、幼児は経験や知識から印象の強い断片を想起し、それを統合し、内的表象（イメージ）へとまとめあげること



図1 幼児が思考し、表現する過程 内田（1989）を参考に作成

した。表現する過程では、この内的表象は言葉や身体、描画などの表現手段を使って、外的表象に表されるとしている。また、外的表象と内的表象はつくりつくりされる関係にあり、内的表象は表現されることで形が整えられ、意識化されるとしている。さらに、内的表象を具体化するためには言葉が重要な役割を果たすとしている。内田の理論を参考に、幼児の思考の過程とそれを表現する過程について、図1にまとめた。

これらの先行研究から、幼児が思いや考えを表現していくために、イメージを想起・統合・表現する過程において、教師と幼児同士の言葉を通じたかかわりあいのあり方を検討する必要があると考える。

(2) 絵本づくりと読み聞かせにおいて表現するとは

松井公男（1994）は、幼児の絵本づくりの実践をとりあげ、幼児の絵やお話には、幼児自身の考えがありのまま表現されていると論じている。また、内田は幼児の絵本づくりや物語行動の分析から、5歳児後半には幼児が語りの形式で物語を語れるようになることを示している。さらに、東山明ら（1999）は「子どもにとって親しい人に絵を見せることは、自分の世界や気持ちをしってもらうコミュニケーション」であると述べている。これらのことから、幼児が絵本を作り、その絵本を教師や友達に見せてお話を語ることは、人とのかかわりの中で、自分の思いや考えを表現することにつながると考える。

本研究では、幼児が絵本を作り、自分の絵本を教師や友達に読み聞かせる実践を行う。ここでの絵本は、絵を描いてお話を作る絵本とし、文字を書くことは求めない。岡一夫ら（1982）は「幼児は、見たこと、知ったこと、思ったこと、言いたいことを絵でお話をする」と述べており、幼児は絵本に文字を書かなくても、自分の思いや考えを絵で表すことができるといえる。また、文字を読む絵本の読み聞かせではなく、絵本の絵を見せながらお話を語ることを読み聞かせとする。幼児が文字にとらわれず、絵で思いや考えを表し、絵を見て読み聞かせをしていけるようにしたいと考える。

2 対話的かかわりについて

(1) 対話とは

佐藤学（1995）は、学びにおいて、「対象との対話」、「自己との対話」、「他者との対話」という3つの対話的実践の重要性を論じている。また、加藤繁美（2007）は教師と幼児がお互いに主体的な関係を築き、対話を通して保育を展開していく「対話的保育」について提案している。岡本（1982）が示した「人びととのかかわりあい」が「発達の間」であることを踏まえると、「対話」を通して他者とかかわることで、対象や自己との対話も深まると考えられる。そこで、本研究においては、教師と幼児や幼児同士が、お互いに主体的に、思いや考えを伝え合うかかわりのことを「対話的かかわり」と捉える。

(2) イメージを具体的にするための対話的かかわり

深田岩男（2007）は、幼児の感性や想像力を育てるには、教師が「子どもたち一人ひとりの生活のなかの内面世界（心）としっかり向き合い、その思いや感覚、感情を引き出し、描いたりつくったりする活動に結び付けて」いくことが大切であると論じている。そのためには、絵の「聞きとり」を重視し、幼児の思いを読みとる必要があると述べている。イメージの具体化には言葉が重要な役割を果たす（前述の内田による）ことを踏まえ、教師の「聞きとり」によって幼児が絵について話すことが、イメージを具体的にしていくことにつながると捉える。絵本づくりの過程で、教師が「聞きとり」を中心とした対話的かかわりを行うことで、幼児はイメージを具体的にしながら、絵や言葉で表していくようになっていくと考える。

(3) 表現を楽しむための対話的かかわり

佐藤公治（2007）は、幼児の集団での読み聞かせについて、読み手（教師）と聞き手（幼児）のかかわりの中に、読み聞かせの楽しさがあることを示している。また、中澤潤ら（2005）は、読み聞かせにおいて、読み手（教師）と聞き手（幼児）がかかわることで、幼児は物語を理解しやすくなることを明らかにしている。さらに、聞き手（幼児）が3人の小集団の場合に、読み手と聞き手がかかわりやすくなること、そのかかわりの中では、聞き手による絵本の内容についての質問やコメントが多く見られたことを示している。これらのことから、幼児が自分で作った絵本を読み聞かせる過程で、読み手と聞き手が絵本の内容について話したり聞いたりできるように、「幼児同士をつなぐ」対話的かかわりを行うことで、聞き手が話を理解し、お互いに楽しむことができるようになる。

(2)(3)で得られた知見を踏まえ、表1に教師の対話的かかわりについてまとめた。これをもとに、本研究では実践に取り組んでいく。また、幼児が「遊び」の中で絵本づくりや読み聞かせを行うことが、主体的に活動し表現を楽しむ姿につながると考える。そこで、幼児が絵本づくりや読み聞かせをして遊ぶ中で、教師が対話的かかわりを行い、幼児が思いや考えを楽しんで表現していけるようにしていく。

表1 教師の対話的かかわり

活動	対話的かかわり		言葉かけの例
絵本づくり (イメージの 想起・統合)	イメージを 具体的に 対話的 かかわり するための	聞きとり 登場する人や物、場面や話の筋などを聞きとることで、幼児が話を組み立てたり、膨らませたりしながら、イメージを具体的にしていけるようにする 幼児同士のつなぎ 幼児が友達と描いた絵を見せ合ったり、思いや考えを伝え合ったりできるように、教師が幼児同士をつないでいくことで、幼児が友達と影響し合ってイメージを具体的にしていけるようにする	「この絵は何？」 「どんなお話？」 「どうして？」 「このあとどうなるの？」 「・・・さんの絵本には・・・が出てくるよ」 「・・・さんのお話、ここが面白いよ」
自分で作った絵本の 読み聞かせ (イメージの表現)	表現を 楽しむ ための 対話的 かかわり	聞きとり 幼児の表現だけでは伝わりにくいものについて、教師が聞きとることで、他の幼児の理解を促し、表現を楽しめるようにする 幼児同士のつなぎ 幼児が読み聞かせする中で、幼児がわからないことを聞いたり、思いや考えを伝えたりできるように、教師が幼児同士をつないでいくことで、お互いの表現の楽しさを共有し、受け止めていけるようにする	「どうしてこうなったの？」 「この絵に描いてあるものは何？」 「〇〇さんが・・・と言っているよ」 「お話を聞いてどう思った？」

VI 保育実践

1 保育計画

実践	週	活動名	ねらい	内容	環境構成・教師の援助
1 「イメージの想起・統合」	第1・2週 12月中旬	友達と見せ合っ て絵本づくりをし よう	◎自分なりのイ メージをもっ て絵を描いた り話を作った りすることを 楽しむ	●クラスでの話 し合い ●友達と描いた 絵を見せ合い ながら絵本づ くりをして遊 ぶ ●自分で作った 絵本を友達に 読み聞かせて 遊ぶ	環境 ・ 道具（紙、鉛筆、色鉛筆等）をテー ブルに置いて、遊びの中で絵本づくりを 進めていけるような環境構成を行う ・ 幼児が作った絵本の置き場を工夫す ることで、お互いの絵本に興味を持て るようにする ・ 自分で作った絵本を友達に読み聞か せて遊べるようなコーナーを作る 教師の援助 ・ 幼児がお話のイメージを具体的に していけるように、聞きとりを中心とし た対話的かかわりを行う ・ 幼児がお互いに影響し合っ てイメージを具体的にしていけるよ うに、幼児同士をつなぐ対話的か かわりを行う
			仮説(1)の検証 幼児は絵や話の内容について、教師や友 達と話したり、聞いたりしながら、自 分の思いや考えを絵や言葉で表して いるか		
2 「イメージの表現」	第3・4週 1月上旬	絵本を友達に 読み聞かせて遊 ぼう	◎友達と思いや 考えを伝え合 いながら、自 分で作った絵 本の内容を表現 して楽しむ	●クラスでの話 し合い ●絵本の部屋づ くりをする ●自分で作った 絵本を友達に 読み聞かせて 遊ぶ	環境 ・ 幼児と話し合いながらクラスに絵本 の部屋（5つのコーナー）を作り、自 分で作った絵本を読み聞かせて遊 べるような環境づくりを行う 教師の援助 ・ 幼児同士が自分の絵本を読み聞か せて遊べるように、幼児同士をつな ぐ対話的かかわりを行う ・ 絵本の読み聞かせにおいて、幼 児同士が思いや考えを伝え合っ て楽しめるように、幼児同士をつ なぐ対話的かかわりを行う
			仮説(2)の検証 幼児はお互いの表現の面白さを共有 したり、受け止めたりしながら、楽 しんで表現しているか		

2 保育の実践1

(1) ねらい

教師や友達に絵本の内容を伝えながら絵本づくりを楽しむ。

(2) 内容

友達と絵本を見せ合いながら絵本づくりをして遊ぶ。

(3) 保育仮説：作業仮説(1)

絵本づくりの過程において、イメージを具体的にするために、教師が聞きとりを中心とした対話的かかわりを行うことで、幼児は絵や話の内容について、教師や友達と話したり、聞いたりしながら、自分の思いや考えを絵や言葉で表すようになるだろう。

(4) 保育の展開

①「好きな遊び」の中で、絵本づくりをしたり、読み聞かせをしたりする。

②クラスで集まって、自分の絵本を紹介したり、友達の絵本について話を聞いたりする。

3 保育の実践2（本時）

(1) ねらい

友達と思いや考えを伝え合いながら、自分で作った絵本の内容を表現して楽しむ。

(2) 内容

自分で作った絵本を読んだり友達が作った絵本を聞いたりして遊ぶ。

(3) 保育仮説：作業仮説（2）

自分の絵本を読み聞かせる過程において、教師が幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行うことで、幼児はお互いの表現の面白さを共有したり、受け止めたりしながら、楽しんで表現するようになるだろう。

(4) 保育の展開

時間	○ 幼児の活動	環境構成の工夫・教師の援助
9:30	○ 話し合い これまでの読み聞かせについて、楽しかったことや困ったことについて話し、今日の活動でやりたいことを話し合う	環境 ・前日までの活動で、幼児と一緒にダンボール等を使って絵本の部屋づくりをしておく。クラスに5か所の絵本の部屋コーナーを作り、4～5名で集まって、読み聞かせを楽しめるようにする。
9:40	仮説の検証 ○ 絵本の部屋で友達と絵本の読み聞かせをして遊ぶ	教師の援助 ・教師は、幼児がお互いに思いや考えを伝え合いながら読み聞かせを楽しめるように、幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行う。また、幼児がお互いにかかわりやすくなるように、それぞれの幼児の姿を見て、絵本の部屋の環境を調整したり、個別に援助したりする。
10:05	○ 話し合い 絵本の読み聞かせをして、感じたことを話し合う	・話し合いでは幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行うことで、幼児が友達の表現の面白さについて伝え合ったり、受け止めたりにしながら、表現する楽しさや充実感を味わえるようにする。
10:15		

VII 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

絵本づくりの過程において、イメージを具体的にするために、教師が聞きとりを中心とした対話的かかわりを行うことで、幼児は絵や話の内容について、教師や友達と話したり、聞いたりしながら、自分の思いや考えを絵や言葉で表すようになるだろう。

《結果》

(1) 絵本づくりをする幼児の変容

図3は、絵本づくりをする幼児の姿の変容を示している。絵本づくり開始時には、幼児は思いつくままに絵を描いたり、友達と類似した登場人物や場面の絵を描いたりする様子が見られた。幼児が絵本を作る過程で、教師は「これは何?」「このあとお話はどうなるの?」と絵の意味や話についてイメージを具体的にするための聞きとりを行った。幼児は絵や話について「女の子があそんでるところ」と説明したり、「うーん、かんがえちゅう」と答えたりしながら、新たな絵を描き加えたり、話をつなげて絵を描いたりする様子が見られた。



図2 絵本づくりの様子

12月前半の姿	12月後半の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・ 思いついた絵を描く ・ 友達と類似した絵を描く 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話をつなげて絵を描く ・ 自分で考えた絵や話を描く ・ 進んで絵本づくりをする

図3 絵本づくりをする幼児の姿の変容

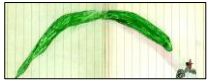

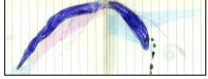
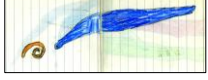
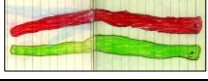
(2) 絵本の内容について話す幼児の変容

事例1は、絵本づくり場面での、幼児同士の対話を示している。幼児数名が同じテーブルで絵本づくりをしていたところ、A児が自分の絵本の内容について話し始めた。すると、B児も自分の絵本について話し始め、他の幼児も、それぞれ自分の絵本について話し始める様子が見られた。その後、教師は絵本を完成させたA児に「どんなお話か教えて？」と聞きとりを行った。事例2は、A児の絵本と教師の聞きとりによる内容である。幼児同士の対話では、A児は絵本の内容について断片的な話をするにとどまっていたが、教師が聞きとりを行うことで、具体的に説明しながら、内容をつなげてストーリーとして話す様子が見られた。

【事例1】絵本づくり場面での幼児同士の対話

A児	： あるところに、へびがとんぼを たべようと思いました① (自分の絵本について話す)
B児	： ええ(笑う)
A児	： <u>へびはいしにぶつかって</u> ②
B児	： おれもおぼけが、かべにぶつかってるよ とうとうーってなって (自分の絵本について話す)
A児	： <u>がんっ</u> ② (ぶつかった場面を表す)
B児	： <u>がんっ</u> (ぶつかった場面を表す)
A児	： <u>いたーい</u> ③ (へびのセリフ)
他児	： おれ、ひまわりかきました (自分の絵本について話す)
他児	： みてみ、ほらおもしろいよ、Aくん (自分の絵本について話す)

【事例2】A児の絵本と教師の聞きとりによる内容

①	<u>あるところにへびがいて へびがとんぼを たべようとしたら</u>	
②	<u>へびはいしにぶつかって とんぼはにげた</u>	
③	<u>へびはおおなきした</u>	
④	<u>おおなきしてたら いつのまにかねむってた ともだちがむかえにきて</u>	
⑤	<u>ふたりでかえった</u>	


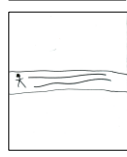

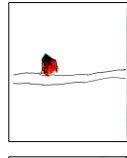
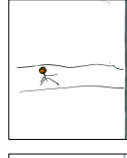
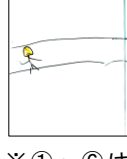
※①～③は事例1における対話の番号と対応する

(3) 幼児同士がかかわりあう姿

事例3は、事例1・2の後に、C児の絵本について、教師が聞きとりを中心とした対話的かかわりを行った様子を示している。C児はA児やB児と同じテーブルで、絵本づくりをしていた。教師がC児の絵本について聞きとりを行っているとき、B児が「ぼうにんげんが、さかをわーっておちてるー」と、C児の絵本を見て思ったことを話し始めた。さらに、A児が「これってなあに？」と絵本の内容についてC児に聞きとりを始め、C児が具体的に説明する様子が見られた。事例1の幼児同士の対話では、幼児は自分の絵本についてのみ話していたが、事例3において、教師が加わり対話的かかわりを行うことで、幼児同士で友達の絵本の内容について話したり、聞いたりする様子が見られた。

事例3では、B児はC児の絵本を見て、「おつかいについて、おとしあなに、わー」と話し、おつかいに行く道の絵から落とし穴を連想する様子が見られた。後日、B児は自分の絵本に「人が落とし穴に落ちる絵」を描いた。また、C児は後日、絵本の話の中で、「おつかいに行く男の子が壁にぶつかった話」を加えた。これは、A児やB児の絵本に描かれている「登場人物が物とぶつかる状況」に類似していた。絵本づくりをする過程で、教師や友達と話したり聞いたりしたことが、絵やお話に描かれている様子が見られた。

【事例3】教師の聞きとりを中心とした対話的かかわり

対話的かかわりの内容	C児の絵本	
教師： <u>どんな話か、教えて</u>	 <p>①</p>	
C児： <u>おつかいのおはなし</u> ① あの子、こどもがおつかいにいってって② おかあさんに、いわれてからいった③		 <p>②</p>
教師：うん		
C児：いったらさ、・・・についた（聞こえにくい声）		 <p>③</p>
教師： <u>いったら？</u>		
C児： <u>あの子、おつかいのさ、おかいものするさ、おみせについた</u> ④		 <p>④</p>
教師：うん		
B児： <u>ぼうにんげんが、さかをわーっておちてるー</u> （絵①を指す）	 <p>⑤</p>	
他児：うふふ（笑う）		
C児： <u>そしてから、かえろうとしてから</u> ⑤	 <p>⑥</p>	
教師：うわー（感嘆の声）、ねえ、もう一回読んでいい？ （絵①を指し、聞きとりをする）[中略]		
教師： <u>このなかにいるの、誰？</u> （絵①の家を指す）	<p>※①～⑥は対話の番号と対応する</p>	
C児： <u>おつかいにいくひと</u>		
教師： <u>これ、いくひと、これは？</u> （絵①の人を指す）		
C児： <u>いってるところ</u>		
教師： <u>いってるところ？ああ、こう出たところ？</u> （絵①の道をなぞる）		
C児： <u>（頷く）</u>		
B児： <u>わーい、おつかいにいって、おとしあなに、わー</u> （絵の中の人のセリフを言いはじめる）		
他児： <u>いってきまーすって</u> （絵の道をなぞる）		
B児： <u>いってきまーす</u>		
A児： <u>ねえ、これってなあに？</u> （絵①を指す）		
他児： <u>かんばん（C児の代わりに答える）</u>		
C児： <u>ふふ（笑う）</u>		
教師： <u>なにになに？</u>		
C児： <u>なんか、へんなの</u> （絵についてうまく説明できない）[中略]		
A児： <u>ねえ、こっちのほう、どこ？</u> （絵②の分岐した道を指して）		
C児： <u>いきどまり（同じやりとりを繰り返す）</u> [中略]		
教師： <u>（絵⑥まで聞きとりした後で）なに買ったの？</u>		
A児： <u>あの、バーベキューのざいりょうとか？</u>		
C児： <u>ふふ、そんなもん</u>		

※ 〃線は教師による聞きとり、〃線はA児による聞きとりを示す

《考察》

絵本づくりの過程で、幼児は絵の内容を説明しながら、話をつなげて絵を描いたり、ストーリーとして話したりするようになった。教師の聞きとりによって、幼児が絵本の話についてイメージを具体的にしていっていったと考える。また、幼児は友達の絵本の内容について、思ったことを話したり聞いたりするようになった。幼児が教師による聞きとりを経験したり、見たりしたことで、幼児同士でかかわりあう姿につながったと考える。さらに、幼児同士のかかわりの後、幼児の絵や話には、友達と話したり聞いたりした内容が表れていた。教師の聞きとりを中心とした対話的かかわりによって、幼児同士がかかわりあうようになり、自分の思いや考えを絵や言葉で表すようになったと思われる。他の幼児においても、これらの事例と同じような姿が見られた。以上のことから、仮説1の手だては有効であったと考える。

2 作業仮説(2)の検証

自分の絵本を読み聞かせる過程において、教師が幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行うことで、幼児はお互いの表現の面白さを共有したり、受け止めたりしながら、楽しんで表現するようになるだろう。

《結果》

(1) 読み聞かせをする幼児の変容

図4は、読み聞かせをする幼児の姿の変容を示している。12月の絵本づくりの実践と同時に、クラスの集まり場面や遊び場面で、自分で作った絵本を幼児が読み聞かせる場を設けた。また、幼児が読み聞かせをした内容について、教師が他の幼児にわかりやすく伝え直したり、読み手の幼児に「どうしてこうなったの？」と聞きとりを行ったりしながら、幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行った。さらに、1月には、幼児が自分達で絵本の部屋を作って遊べるようにすることで、幼児同士で読み聞かせをして遊ぶ姿が見られるようになった。






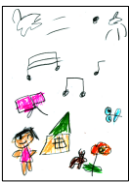
読み聞かせの様子（12月）		絵本の部屋での読み聞かせの様子（1月）
場面の様子	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>集まり場面</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>遊び場面</p>  </div> </div>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
話し手の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>絵本を見て話す</u> ・ <u>教師や友達の聞きとりに答えて話す</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>友達を見ながら絵本を見せて読み聞かせる</u> ・ <u>友達の聞きとりに答えて話す</u> ・ <u>何度も読み聞かせをしようとする</u>
聞き手の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>絵本を見つめて聞く</u> ・ <u>絵や話について、思ったことを話す</u> ・ <u>自分も読み聞かせをしてみたいと話す</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>絵本を見つめて聞く</u> ・ <u>体を寄せ合って笑う</u> ・ <u>友達の絵や話について面白さを具体的に話す</u>

図4 読み聞かせをする幼児の姿の変容 ※下線は対応する姿を示す

(2) 友達と表現の面白さを共有する幼児の姿

事例4はD児の読み聞かせにおける話の変容を示している。12月の教師による聞きとりでは、D児は、絵本に登場するくま（絵①）と女の子（絵②）の関係について、具体的に話すことはなかった（A②）。教師は、D児が友達に読み聞かせをして遊べるように、クラスの集まり場面や遊び場面において、幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行った。1月になると、D児は友達と読み聞かせをして遊ぶようになった。遊び場面では、D児が友達と絵を指して話をしたり、笑い合ったりしながら、友達に頼まれてくり返し読み聞かせをする姿が観察された。友達への読み聞かせでは、D児がくまや女の子の関係について話す様子が見られた（B②）。検証保育後に、教師が個別に読み聞かせをしてもらったところ、D児はくまの様子を詳しく話し（C①）、くまと女の子のやりとりについて具体的に話しながら（C②）、読み聞かせをする姿が見られた。

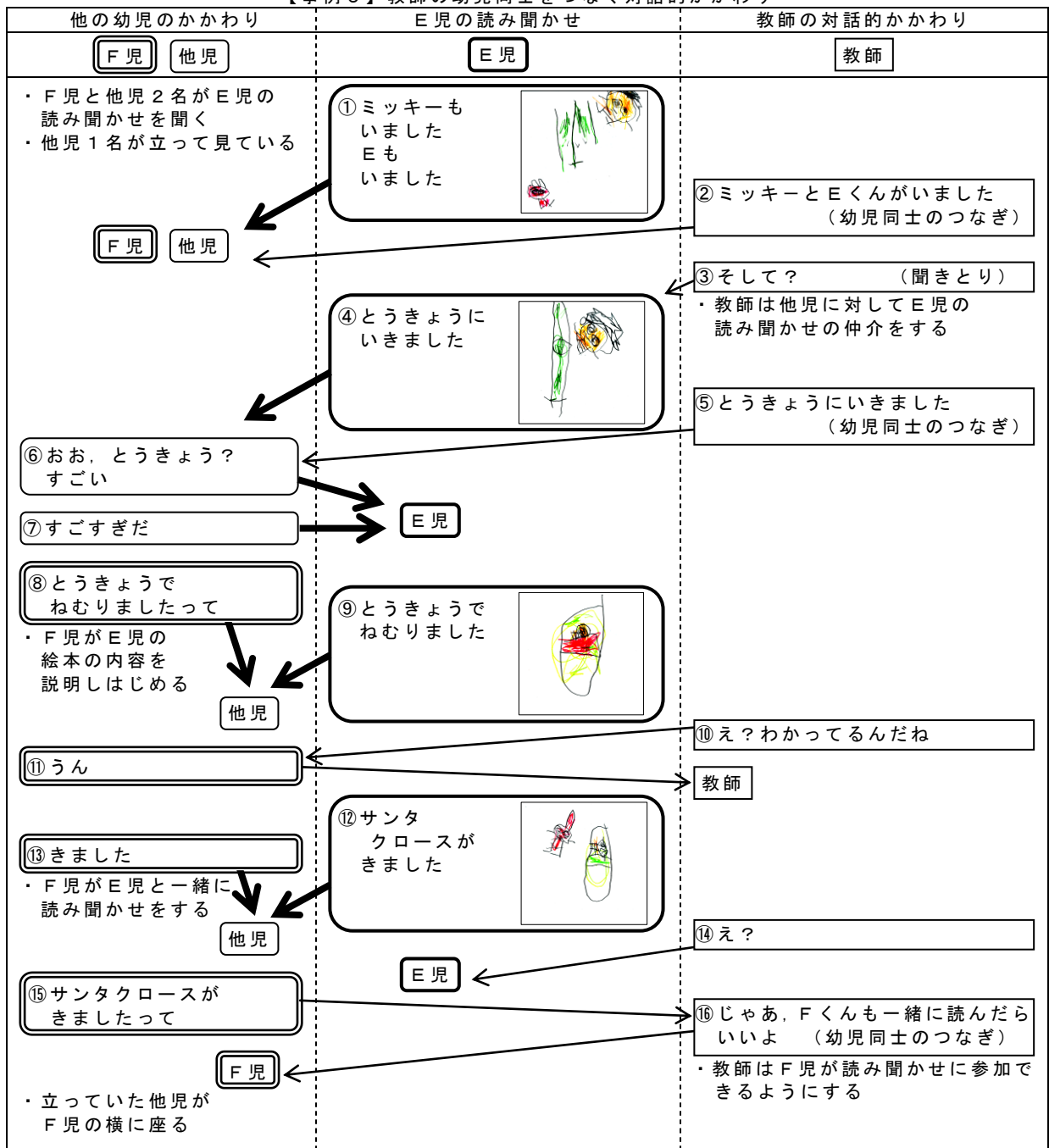
【事例4】D児の読み聞かせにおける話の変容

絵本の絵	絵本づくり場面で教師が聞きとりをした内容（12月）	遊び場面で友達に読み聞かせした内容（1月）	読み聞かせの個別の記録（1月）
 <p>①</p>	<p>A① とんぼがとんでるときに、くまがとんぼをとろうとしたときに、わるいとんぼが、とんでいきました。</p>	<p>B① くまくんは、とんぼをたべようとしていました。そのとき、・・・。 とんぼは、かくれちゃいました。</p>	<p>C① くまがとんぼをたべようしたとき、・・・がはっていたとき、とんぼがそらまでびゅーんと、どっかにいって、くまがあれあれと、しらなくなった。</p>
 <p>②</p>	<p>A② おんなのこはいえにかえりました。</p>	<p>B② それだからいえにかえったおんなのこは・・・。 それだから、くまくんとおんなのこはわかれみちにきて、わかれてから・・・。</p>	<p>C② そのとき、くまがおいかけたとき、おんなのこが「なにしてるの？」とんぼがかくれていました。「とんぼが見つからないの」</p>

(3) 友達の表現を受け止める幼児の姿

事例5は、E児が幼児数名に読み聞かせをする場面での、教師の幼児同士をつなぐ対話的かかわりの様子を示している。E児は自分の絵本を読み聞かせをしようとしていたが、周りの幼児にうまく伝えられずにいた。そこで、教師がE児の話を仲介して他の幼児に伝えると、周りの幼児が話を聞き始める様子が見られた。さらに、F児がE児の代わりに絵本の内容について話し始めたことで、幼児同士がかかわりながらE児の読み聞かせを聞く姿が見られた。E児とF児は、検証保育後のインタビューにおいて、「(自分の絵本を)よんでおもしろくなった(E児)」、「Eくんが(絵本を)みせてくれたのしかった(F児)」と答えている。

【事例5】教師の幼児同士をつなぐ対話的かかわり



※ ← は幼児対幼児の対話, ← は教師対幼児の対話を示す

《考察》

読み聞かせの過程で、幼児は体を寄せ合って笑い、お互いに交替しながら読み聞かせをくり返すようになった。教師が場を設定し、幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行ったことで、幼児同士が読み聞かせを楽しみながら遊ぶ姿につながったと考える。

また、事例4のD児は、友達への読み聞かせをくり返すことで、読み聞かせの内容が変化し、話が具体的になっていった。教師が幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行ったことで、D児が友達と絵本の面白さを共有し、イメージを具体的にしながら表現することを楽しんだと思われる。さらに、事例5では、幼児がお互いにかかわりながら友達の読み聞かせを聞こうとする姿が見られた。教師が幼児同士をつなぐ対話的かかわりを行ったことで、幼児がお互いの表現を受け止めながら、読み聞かせを楽しむことができたと捉える。他の幼児においても、これらの事例と同じような姿が見られた。以上のことから、仮説2の手だては有効であったと考える。

3 全体を通しての検証

《結果》

(1) 絵本づくりを楽しむ姿について

絵本づくりの実践では、27名中22名が遊びの中で2冊以上の絵本を作る様子が見られた(図5)。検証保育後のインタビューにおいて、絵本づくりをしてどうだったかを質問したところ、27名全員が「楽しかった」「面白かった」と答えた。その理由を聞くと、「描くことが楽しかった」や「考えることが面白かった」等の答えがあった。

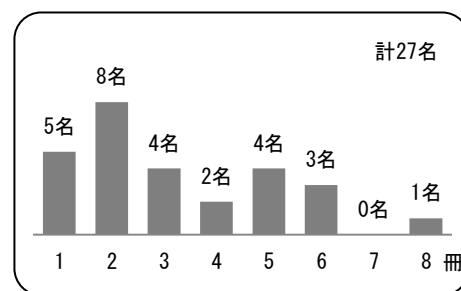


図5 絵本作成数別の幼児数

(2) 読み聞かせを楽しむ姿について

読み聞かせの実践では、全員が自分の絵本を友達に読み聞かせる姿が見られた。検証保育後のインタビューにおいて、自分の絵本を読み聞かせをしてどうだったかを質問したところ、27名全員が「楽しかった」「面白かった」「嬉しかった」と答えた。その理由を聞くと、18名の幼児が「友達がおしゃべりもしないで聞いてくれたから」、「みんなで読んだらとっても楽しかった」等と友達のかかわりについて答えた(図6)。また、7名は「友達に読むのが面白かった」、「絵本読むのが大好きになった」等と自分が読んだことについて答えた。2名は楽しかった理由をうまく説明できなかったが、「楽しかったから」等と答えた。

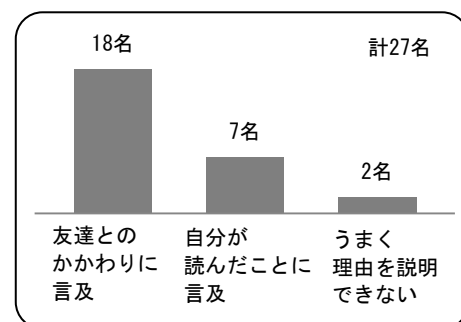


図6 読み聞かせをして楽しかった、面白かった理由

友達に絵本を読んでもらってどうだったかの質問には、27名全員が「楽しかった」「面白かった」と答えた。そのうち17名の幼児が「・・・ちゃんのあかちゃんがうまれた話がおもしろかった」等と具体的に友達の絵本の内容について話した。また、「自分とちがう絵本を作っていて面白かった」と自分との違いについて話す幼児もいた。

(3) 絵本づくりと読み聞かせを楽しむ姿について

検証保育後のインタビューで、絵本づくりと読み聞かせについて、関連させて話す幼児がいた(表2, 下線部)。インタビューの回答から、絵本づくりと読み聞かせの過程で、幼児が友達とかかわりながら楽しんだ様子が見られた。実践場面においても、友達に読み聞かせをして遊んでいた幼児が、「絵本少ないから、作っていい?」「もう1冊作りたくなかった」と教師に話しかけてく

表2 インタビューへの回答

A児	G児
絵本を描いているところ(が楽しかった)。(読み聞かせは)人の前で緊張した。嫌だと思ったけど、やってみたら楽しかった、みんなが聞いてくれたから。(絵本を何冊も作ったのは)ちよつぱり読んだら、あつというまに続きがなくなるから、(友達に)見せられないから。	絵本作ったときに、みんながおもしろいって言ってくれて、どんどん作ったから(面白かった)。自分の(絵本を)読んでみたら、みんな見てくれた、パチパチ(拍手)して、すごいねつとか言ってくれて、もっと作ろうって思った。

ることがあった。読み聞かせをすることで、さらに絵本を作ろうとする姿が見られた。

《考察》

幼児が何冊も絵本を作り、絵を描いたり考えたりすることを楽しんだ様子から、幼児は絵本づくりにおいて、絵本の内容についてイメージし、具体的にしていく過程を楽しんだと考える。読み聞かせにおいては、読むこと自体を楽しみ、友達が聞いてくれることを意識するようになった。「聞いてもらう」ことが、幼児にとって表現を楽しむためにとても重要であると考え。友達に読み聞かせを聞いてもらったことで、受け止められた喜びを感じ、さらに絵本づくりや読み聞かせをしようとする意欲へとつながっていったと考える。幼児が友達の絵本の面白さについて具体的に話す様子からも、幼児がお互いの表現の面白さを共有し、受け止めている姿が伺える。

以上のことから「絵本づくりや読み聞かせの過程において、教師が対話的にかかわりを行うことで、幼児は自分の思いや考えを楽しんで表現しようとするだろう」という基本仮説が検証できたと結論づける。

Ⅷ 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 教師が聞きとりを中心とした対話的にかかわりを行うことで、幼児が絵本づくりを楽しみ、自分の思いや考えを絵や言葉で表すようになった。
- (2) 教師が幼児同士をつなぐ対話的にかかわりを行うことで、幼児が友達に読み聞かせを聞いてもらう喜びを感じ、お互いの表現を受け入れながら、自分の表現を楽しむことができた。

2 課題

- (1) 幼児が豊かな発想で表現を楽しめるような、教師の対話的にかかわりや教材研究の工夫
- (2) 絵本づくりや読み聞かせ場面以外における、教師や幼児同士の対話的にかかわりの工夫

《主な参考文献》

『幼稚園教育要領解説』	文部科学省	2008
『幼児心理学への招待』	内田伸子	サイエンス社 1989
『子どもの絵は何を語るか』	東山明・東山直美	日本放送出版協会 1999
『対話的保育カリキュラム』上・下	加藤繁美	ひとなる書房 2007・2008